



序



雪堂社ぬ〜白牛光隆の風身の奴と云く吟席と
 欠るの夏季あり其折く初学社熱るるの熱く等
 中より自無一物の上の扱〜して去るも常任不愛哉
 依〜句く能詩を因なり〜のふ〜一室も然也も詠〜の
 稱詔〜して百象よかり能も又高天世際なり物
 自は家色蕉門の取捨も〜か〜の牛子〜結と
 深く〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 孫〜の又書集書あり〜の母なり〜〜家社社
 兼〜し〜〜〜〜の好士便と〜せめか〜〜あ子

写一客子争ひく魚魯の遠い山覚来か多し
梓川河くちよゆきまきとまきりよすむ牛亦るれり
諸して道加子波心一帖附るるも諸君此二歌とて
所謂義と徳のすくこときりしむ是と讀て枕と書
人無かぬは差り故蝶と本て此まの佳境と遊らん

雪中菴蓼太述



正花論

雪堂白牛選



○花 花の本意よりふる花とかりたり出た穠のまきりて
穠むくしては花よ見ひは花ハ一巻の陽うてをねくく
とふやうな花と本とまきりて花菫の白花ハ穠よわくはま
穠よわくはまきりては此意と解とを
○花の波 花なり 花の水辺なり 但水辺の海ハ白波よるて
連歌新式の注の執なり 花咲盛なりを波よ見まきりて
花あしと花花之種也之由也わくは波のむと波とを
見まきりてハ元來波あしと種也のむとて花花よわくは
種也よわくは又波も花のくみりて各別之詩筆よる

うしこ二句去とあるしういかなりの類なり
○ 花の滝
花の波も同じく但滝の多りの花もふ句よて滝とをよと
ひひまらる句なりと各別と志くしと植の山にたみはなり
花の波神を滝とえまらる句なりと水辺のうたを

○ 花の雲
口 巾傘の波は植のよも花母のよも三句去かはら
花と雲もえまらる句なりと花母のよもえまらる句なり
花母のよも又雲と花とをえまらる句なりと花母のよも
○ 花の雪
口 えまらる句なりと海はよもえまらる句なりと波のよも
同じくはらなり
○ 花の錦
口 花と錦もえまらる句なりと花
花はよも錦は見えわらせし柳樹とてよもえまらる句なり

屋しとみ又源と考て花の字を何とこまは絵の花と植のよ
二句去なり
○ 花の雲
口 えまらる句なりと海はよもえまらる句なり
但花の風は花とをえまらる句なりと風は花なり
右花なりと春と連袂新式は分別とて物の類して生植のよ
巾傘は花の滝花の波植の水辺は混合し花の雲花母のよ
混合し花の滝は植の水辺は山は花のよも植の花の波は植の
水辺は花のよも植の花の雲は植の花母のよも植の花のよも
よも今時俗語は若くは遠くはさくははは
関人カを入るすうつの間を句よあて分別あり

○ 花軍
口 花なり
是ハ故事の通天寶遺事に唐の玄宗

長安の士女春時より寄成花と求相闘し、侍員とが試て
花合として勝まげといひむるあり、吳なる三香の多きこと
勝と定し、くハ蓋く千金と以て名花と集、庭に植、花合の
依り志らりしと、初、美なる馬車とそく、地より出、花と名ぬ
是と探、表の宴とのみ、又華法、まよと楊貴妃と立別、侍と立
花と以て侍女とお合し、め試らりし、是と華法、まの風流陣
とりふなり、○花園、口、侍傘の通し、てより、定路の花
園ハ、括り、孝む、之、山、の、在、の、名、を、い、ふ、に、ま、あ、り、た、花、園、院、ハ
正花よりの、○花の山、口、花山名、正、此、名、ハ、唐、も、あり
咲く、く、自、ふ、く、く、あ、く、て、ハ、正、花、よ、り、初、ひ、か、く、侍、傘、の、院、を、

○花畠、口、植、わ、り、ま、え、○花の香、口、花の香、よ、油、の
香、雨、と、ゆ、ふ、なり、○花の白ひ、口、花の白ひ、よ、袖、の、香、ハ
七、白、ゆ、ふ、なり、○花の、口、花の、え、く、又、花、傍、の
紙、と、て、丸、く、して、行、道、の、時、敷、り、花、と、く、く、く、正、存、の、紙、よ
菖、花、と、く、く、く、く、り、い、つ、れ、り、正、花、と、侍、傘、よ、傍、家、の、お、り、誰
の、祝、あ、れ、し、も、芭、蕉、門、の、式、よ、ま、ま、せ、て、ま、と、附、屋、一、を、植、わ、り、
二、向、去、り、り、誠、の、花、と、く、ハ、備、よ、及、り、なり、○花とゆ、く、口
侍、傘、よ、り、法、華、經、の、水、陰、草、本、の、四、種、の、花、と、ゆ、く、り、口、
と、い、か、り、し、も、ま、え、く、正、花、と、植、わ、り、花、の、名、と、い、く、正、花、よ、り、
花、と、ゆ、く、り、と、慶、長、せ、ん、植、わ、り、二、向、の、正、花、と、ま、と、附、り、

○花と宿 日 在りしあはれ ○花とま 日 人備しあはれ
 ○花と友 日 人備しあはれ ○花と結 日 ○花とさ 日
 ○花の宴 日 ○初花 日 ○花の蒼 日 ○花の葉 日
 ○花の枝 日 ○花の咲 日 ○落花 日 ○花の 日
 ○花の輝 日 ○花見酒 日 ○花の 日 ○月花 日
 右の花なりし春之極のて花の神なりおこしと極のまの
 去る花よ二向より極

○花四 日 花のり 春之極のて秋教之花四は極の極の極
 下は極のて秋教の花の極の極の極の極の極の極の極の極
 秋教よ衣衾と書し極の極の極の極の極の極の極の極の極

ようして秋教よなり極の極の極 ○花入 日 ○花生 日
 ○花の 日 声のり ○花の 日 花と折入る極の極
 向神よよう人のかこころの極の極の極の極の極の極の極の極
 ○花の筒 日 ○花の盆 日 ○花の鈴 日 名の群
 花と花の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極
 花の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極
 風よ吹くもまの極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極
 中よわりの極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極
 花の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極の極

りるをいづれもなせたり

右正花なりまなり意賊なりしもの花の用なりしころは
二句去まは二句さるる

○花の岩 花なり 居たり ○花の隣 口 ○花の意 口

○花の戸 口 ○花の扉 口 ○花の席 口 ○花の庭 口

右正花なりまは花の三句は花の二句去まは二句去

○花の主 花なり 人備たり ○花のあり 口 ○花の友 口

○花の住 口 ○花守 口 ○花賣 口 ○花作 口

右正花なりまは人備の三句は花の三句去まは二句去

○花の縁 花なり 妻之句はまはるる花のまはるる

知人はまはるる花のまはるる花のまはるる

三句去れ一出一して花の縁と意の句なりしころは

二句さるる ○花の姿 口 ○花の教 口 ○花の唇 口

○花の心 口 ○花の肌 口 ○花の髪 口

右正花なりまは花の三句去なりまは二句去は人の
すしにまはるる花の三句去なり

○花衣 花なり 花なり ○花の袖 口 ○花の杖 口

○花の衣 口

右正花なりまは花の三句去は二句さるる

○花の都 花なり 妻之 ○花路 口 ○中華 口

右正花なり。春之梅也。二句去。但花の如。昨茶花の本と添
く。花白あり。一。季の。花の。後句よ。地。之。か。く。本。の。間。の。む。れ。花。引
也。あり。い。つ。れ。も。本。と。添。る。句。や。く。い。ま。も。梅。也。三。句。ま。り。な。り。

○ 花の踊 花なり 湯傘子もやなり盆の踊とくくくくくく
足て踊もも若なりハ正花よか。ハ春之梅也。二句ま。り。な。り。
庭。く。く。あ。り。あ。り。も。花。の。下。に。て。踊。向。祈。か。く。ハ。梅。也。三。句。
去。ハ。盆。の。踊。と。添。て。花。踊。と。く。く。句。祈。か。く。ハ。秋。の。正。花。なり。
梅也。二句去。ハ。花。の。踊。ハ。春。之。花。踊。秋。之。○ 花心 口
○ 心の花 口 花ハ心あり ○ 人の花 口
右連歌新式。ハ。正。花。なり。春。之。梅。也。二。句。ま。り。な。り。ハ。燕。門。下。也。

梅也。二句去なり。

他の季の正花

○ 余花 初夏なり。梅也。く。く。ハ。春。なり。○ 夏之花 日月之
ま。夏。の。花。ハ。春。なり。○ 花又時者 花又時者。む。む。ひ。て。ハ。夏。之
郭。ハ。春。と。ハ。字。ハ。添。生。と。ハ。む。む。む。む。ハ。春。也。ハ。春。也。
添。て。も。夏。なり。○ 花火 秋なり。梅也。ハ。あ。り。夜。分。なり。見。と
花。ハ。用。紙。子。師。傳。あり。○ 花相撲 秋なり。古。き。伝。書。ハ
又。ハ。是。ハ。除。時。ハ。雨。空。ハ。相。撲。と。僅。ハ。石。和。人。より。の。引。出
物。と。花。と。ハ。よ。う。の。名。あり。ハ。あ。り。ハ。相。撲。の。方。法。を。れ。ハ。秋
なり。ハ。秋。ハ。あ。り。ハ。作。り。也。の。花。ハ。准。て。梅。也。ハ。く。く。ハ。春。也。

花彌は同然なり ○花枕巻 秋なり夜分は枕のよき
 伸の花はほむる ○かま花 年よるは十月梅咲る
 あら小まるとりぬ(正花なり) ○餅花 正月なり清筆に
 枕の二句去とあり本竹の枝は分るぬ又伸の花はほむる
 正花なり
 右の外は他の季の正花古き俗書なりあるは近年又
 冬の文字を入ハ法は他の季の文字を加(他の季の花は作
 の手柄とく)夏の花のなまを失ふやりのなまをさぬハ林の
 字を加(正花は成かるといふ)とあるなり

雑の正花

○花正花 正花なり 枕の二句去なり ○花の花 口 枕の
 あらまき(ソラ)の花ありとも花とふ字の称はなり
 ○花むらひ 口 伸の花はほむる ○花壺 口 花の
 絵あり壺なり花の花はほむる ○花報 梶原系季
 籠に梅花と挿るるは名ありとも吳説ありとも同し
 ○花形 口 清筆は正花の説あり小報の花形は思深
 していさく正花論のねをむきと關はれとも向花の扱ひ
 魚一也蕉翁古門人へ叫まらんとをさぬ晋子 里梅の
 類とみて 里梅や蘇の潤の子名かけは向花と味(程師傳と
 尋る) ○花塗 口 ○花かひさき 口 鞘綴は花の

控後ありたり後の花は下(一) ○茶の花番 口食花

かり ○花子の粗云 口人備之 ○花船 口食花之

○花の花 口夜分たり句新よりして置るもや花を

○花毛纏 口 ○花七 口 ○花菱 口 花と感る

句新よりハ控は二句去花の下は表より新よりハ控は三句

去(一) 是ハ一庭の捌より在(一) ○花嫁 口人備之

○花舞 口人備たり花嫁花舞ハ句新よりして意なり

控は二句去たり(一) 傘は難の花は下ハ蕉門下して表と

ゆりしは附るなり ○詞の花 口 控は二句去なり

○花やき 口 ○声花 口 ○花やう 口 花やうとハ

棠の字と書の花は下ハ花やうと稱員する詞は下
花やうと書て正花は用白いつれハ花は對していふ論
及よりなり

右二十一ハいつれハ控は二句去なり 難の一字と添はハ花

葉は至て反冬の花は出たり時花を附る用と知(一) 是れと

詞の附句は表花とありけりハ係は花と好む(一) 是れ

蕉門の捌なり 是ハと新古の花別とみたり

○花紅葉 正花なり 燕して表花は下ハ難なり 是ハ重なる

系物なりハかり句新よりして控は三句去なり 又ハ二句を

去(一) ○花実 口 是ハ花は下難は(一)

正花附合

○花 發句服着三まてよハ花の句まー四句めよと八句の
まてハ花の句すなかり

○花子梅と附合 元よると大切のまてハ和歌も花の歌とて
梅とよむりハハくくも附合ハ前句と同意ト成なり是と
おそして連歌も梅人梅戸梅朝々と或ハ淡黄梅銀梅と
附るなり貞徳の詠も前句梅めさるよハ附て若かりと

發句 ちりむとて花もゆさー首の脊 宗因

ワキ かさけくゆれ山さくく人

梅くくゆれ名かりし梅人とかろくを梅のありの

人よるふらありなり前句梅あり花也梅人と附る

發句 幸崎の雲ハ新より 續子 芭蕉

ワキ 山ハさくくと云ゆる妻雨 尚白

かくのこく附るは雲傘も前句の正花梅めさるる句なり
同意よかり之甘く刺しゆる梅子花とハ雲く附るなり
あり案よ幸崎の句ハ松の句として花ハ晴之依て生植の
梅と附るなり前句根かー花かりハ梅附て若く
さるかり

○梅子花と附る 程以大切と云正花と前句の梅子引自
らまてしるんおかりハ前句の梅梅貝梅戸をハ梅也

ち〜ハ咲きり去の花を附〜生植の梅なりハ花を花の
花嫁花解ると所を〜是又花を梅と附る人約同然
きり〜きよう〜吉と連歌よ 殊に梅よりハ梅山より
句よ「花さや小嵐の乃ハ徒や〜と附るるなり

兼句 梢より来て〜を母也 梅大梅

ワキ 猿まふこよ〜花と又於此 守武

兼句の犬梅の吠〜さや〜ハか〜梢より来て〜を
母也 犬〜して梅と句と云ふ〜よりなり 依て犬の
かゆは子猿と附出〜よりなり 兼句の犬の句よ云々
句かり也〜よまの花と附るるなり 連歌よ

兼句 さ夜と志の〜梅さく陰 宗長

兼句 梅とさむく梅兼よ明とめて 宗長

紹巴の夜は夜さく花と見んとて火燈を照らしも麻を
ねり〜ちかく見ぬよ〜故に皆夜花と見〜あるなり
三条西段の兼句よ「麻ぬる夜と花のおもひあ〜は
つれもば〜花と見か〜ま〜か〜の〜は〜は
あ〜も〜花と梅〜と〜世也を思ひ〜は〜は
句の表のま〜に梅〜と〜名也 連歌例格〜は〜は
句の表通よ〜と名人の業なり 尚附句の心保く道とを
新〜く句の神と考〜る〜あ〜は〜む〜と〜事〜

かろり冷やまゝとやぬ人のよめゆ〜
むつ〜とさよと好じよのかり仕りぬせらるるや句やう
古め〜とありて才一花茶又ハ花茶七句の同様と出
事や月かりや〜一花の貴人客人又ハおんおんの人
を風むつ〜と仕出さしハ事く〜と答度〜とせハ
一花のふ真さる〜と一花の初老のや宵に梅の句よぬた
花の句と附る〜

○花よ言聖と附るるゆふ 花より一聖附句とゆふ
萩よ玄珠也紅糸よ龍田茶よ宇治酒よ常夜かと附句と
ゆふとあしと見も赤句のゆふかりとたそしてかり附句と

ゆつち越〜と斟砂ありさう吉野よ花ハ附るる〜當時
是れい〜かり花茶よ交〜とよ〜とゆふ句ハたそと
屋さかり又吉野とゆふ花の句川とて附るる物ぬ
やもよ〜とかり

○花の句よ旅の字 浄筆より花とび〜と句よ世と
か〜と〜とゆふ花よあ〜と旅とら〜と字入〜と旅よ
あ〜と世旅よと花と〜と旅と〜と旅と〜と今時
旅神の花多〜と句化〜と分る〜とゆふ勿梅なり

○梅海棠梨子ホよ 花と附るる〜とゆふ花と附るる
赤句と回意よ成るるあり口交

○ 短句の花 短句の花連歌は二ツあり(きりぎりしを
 例借し二下ハきりぎりし去かか)一の折二の折をくはしてハ
 せぬなり(四は長句の花一折して又短句の花あり(一と
 連歌新式の抄よるをえたり)名取う恋とむいひる花の句
 二句ありハ是又同折なり(きりぎりし)短句の花好むる
 事よてハなきかた

○ 名所の花 例古ハ連歌は三本のより 勅許して宗祇
 初く名所の花あり(俳諧もこれに倣てなり)名所の花と
 して百韻は四つ(白ひの花とりよる)是等は名所の花は
 香と次也(白ひの花とりよる)云傳へしはたはハ(名所の花ハ

名所の花にしてするもあり又名所とあるハ(名所の花
 多とけり)勿論之段て白ひの花もいひか(先師の傳は白ひ
 せりハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 真に(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 例古の業として(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 手際あり(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 仕出して(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 大や(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 右の花の句の古例ハ連歌新式(俳諧)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ
 嵐雪木のれと(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ(名所の花)ハ

花の定座乃事

○花の定座長句と定座と凡 ○百韻ハ初裏十三句の二の
裏十三句の三の裏十三句の各跡の裏七句の ○歌仙ハ
裏十一句の各跡の裏五句のなり右ハつれも裏の見渡の
終長句終下ニ高れなり口波

左の巻既ハ古史嵐雪集中句ハの花ナリ
各句の骨柄抄ナリナリ古史の古哲も稱
ありとそとそと花ハ柄ニありとりの説句ニ

引屋とのたよりあれそとそと一巻等の二三と
次一巻となんそとそと

歌仙

嵐雪

花ニ能く少くはなれりあり山橋

草約か一匹雪の古乃 白牛

衣らむ大工も烏帽子ゆるきて 蓼太

時ニ二代の藤お者なり 調布

門田ニ氷通せり楊の月 蓼杞

何ヤニて香の蝶さし 牛東

帆柱と立木と雪は花か
 古ひて園も糸と初々
 かつ男のむらり揃う老より
 油取いろはの才子も燕
 出―板てはと入る風の響り
 禪もむと何誇く湯あう
 根さ―と漁舟替て初春
 百夜の繕紙茶と津垣
 下陰の披海と兼の夕榮
 牡丹ハカ〜ぬ我心の妻
 把 太 貢 布 東 太 把
 牛 鏡 貢 太 把

花之部

菫華と追うけて刈り〜
 花のうら子てあはれのあま婦哉
 渡のあはれ撞櫓も〜
 傘持〜ぬ人も揃ふや〜
 菫華や権本はゆきの〜
 三日月の舟舩も〜
 谷川は穀の水も〜
 花うら子初の踏も〜
 菫華も〜
 定家
 寔晋祢
 祗傘
 蓼把
 如雷
 如風
 蓼左
 卯雲
 眠我

本一疾と清くし華の朝ゆゑも
 入おや夢む例うむむいろ
 幸山一月ハ追くま華くもり
 浮き人よしやあれむ少のり
 花と見よのわら魚あり滝の糸
 雲と吐く華ありまぬむもり
 星かか中け華の縄下南
 川たむむ欲ハあがりむ此枝
 菖おや炭電白まきあふふ
 手追ふくも一重咲花とるん

湖風 南羅 吐月 挑鏡 牛東 白翅 友鴉 青布 曙山 蓼花

利捨てとてや華の影いけ
 夜星と華よわらぬさうりかか
 と物るれとむの倉や叶まう
 菖入きて花や化らん破訓貝
 人菖く聖紡華のすくまか
 日と花の巻たかむ曇か
 清く又東明ハあまきしるま
 菖おやおのりぬり不
 疎醒て疾るああり花く蝶
 夕々れや偶田く富士のおも

八窓 芦一 爲好 箕山 麦由 曲阿 女 隠里 其要 市柳 若水

三月ハ因もろ様一花あり
 人多や華より色のくくねもて
 帰ら一や疎外花の本陰の家
 分入ると心海と華は白ひの南
 折る客とあくく一花のまゝ
 約有此程ひいれ一華の鈴
 みより世ハ空も溜はむ此雪
 月を流も華一一目澄や机
 花のくく華もくく一花の山
 根もゆめぬや一動くやむのき

蜘蛛
 盤中
 竹都
 調布
 波光
 女言
 圻山
 沾慶
 宜同
 兀子

物くして華より度くや七り自
 本撫りく僧あり花の六奇仙
 一志くく一花と一華のき、如
 谷水又山くく一海のむ見哉
 花咲や田くく一花あり大ねく
 墨多て市あり花又山鳥
 明かの一色も雲は華の雲
 谷川もくく一花の言毎か
 市言華又くく一花の紙立外
 花咲て思ふ返帆や鳩の海

杜十
 周竹
 都雁
 丸水
 蓼且
 砂川
 可穂
 山紫
 和星
 萬古

茗のこけ志がやかくして華蓋
 華のき晴て栢張くまると、
 伽羅とあつこ下着もあり華衣
 多くくと掃ぬ華やうしの陰
 胡麻すけ人ゆり起せおさう
 花の世や一杵白文茶の飯
 山山路華もとる雨まき
 命ふむく終くや華見酒
 松と見て何ましくやう華蓋
 吹花すまも又うー花車
 巴陵 竹逕 卜我 里遂 拾葉 大布 梅動 蟻林 栗林 山史

うましくや人よ疎く華のま
 ちー茶あて麻布んお張陰
 華さして駕阜華のまやこか
 華一本布よかくして暖まら
 拾ひも校う付ありうしの妻
 押ゆりく人とま本や華蓮
 花七日くここのぬま張巻このか
 音楽ハいつまの御祈をむの雲
 酒醒をふとハ風あり華の山
 散花よ又下着の音あつか
 帰景 蘭阜 蓼太 魚波 慎車 瑞雨 永我 一井 直賀 快風

河野武藏

みより一歩や花とちりて夕暮の
 古筵
 爰輕一見よふ華の雲母坂
 至來
 岩よ飯焚きて花のゆき一ふ
 花明
 夢解の道そあつたの華は東
 大賦
 爰をや庚子と云れど蝶ひと川
 吏仙
 後士の義ほ一字ありむねあり
 夢駒
 津がしらよ能も紐なり華後
 眠江
 川裾ハ羨解返やそれの流
 山奴
 白妙や夕日よかゝる花のき
 太賀
 羨望とほとほりぬ華の山路か
 扇斗

華ややきもかぶりぬ人の声
 女野菊
 口きく以利つて中より花とちり
 女仙衣
 枕むより留まりて華の麓哉
 隨之
 穀をいりやれし水の花りせ
 楚水
 峰くと指す華のさうとふ
 機石
 投出—の小刺ハ以テ華を
 氣腹
 火燈—の夜く花ゆかゝるを
 枝貢
 舟来あり園ゆき花の一本も
 宜中
 華咲やホウ文もま山法師
 吏登

橋之部

芭蕉翁

表の夜ハ橋よ明て仕葉多る
 夜さくくや耳ハ志後さ村鳥
 赤穂ふと此む形ハ也糸さく
 咲日かきき奇も志あはる
 入おやあけ人まさる長を
 却かき家の橋梅や山さく
 山伏と詠くく堤むさくく
 風よさく筆もあり山さく
 宵もりよ海黄さくくの日わが
 笈山 鼠腹 魚沢 枝貢 素明 玩象 物雲 婆心子

山嶺又陰のさくまはさくく
 吾滑て包虫及や山と久良
 常規やさくく又殊形胡胡
 麻の芽よあて名と結は橋哉
 糸と見よのかる多あり初橋
 立さ橋え馬さ小袖也ち橋
 兼益又吾と兼さくく物
 寺あはるふき源ハ山さく
 大ぬくもまはる山橋
 豆腐より先ハ書さる橋
 蓼旦 萬古 蟻林 梅動 直賀 慎車 詩石 至來 古莖 祇什

雲よりハニヨリもあり山さく
 如月の闇かゝふ一初と久良
 烟中よりすき流して橋の角
 折とへて其秋のききささく
 友のこははききささく
 夕ぐれのみぬくもあり橋
 友あてハ弟とすてぬ橋の
 夜明てハ人の寝や山さく
 妻のりはきい峰ぬ橋の
 小山又妻の末座や迷さく
 山紫
 破川
 可穂
 子帘
 蘭府
 雅堂
 都雁
 巴陵
 竹逗
 ト我

嗟時も風のゆるき久良の角
 夜あそふ初あり一八重橋
 獨坐又伊路も手あり家さく
 去々其の音又音く山さく
 人又酒看やと歌と山さく
 琴車の分入くややと久良
 林麻のく流の幕や山さく
 遠すぬ里もと久良の友り我
 造本の里ハさく山さく
 夜ハ月の桂もゆる橋可南
 蓼把
 楚水
 牛東
 北魚
 妻由
 龜石
 女
 隱里
 其要
 曲阿
 蘭江

空かゝりも見るも此かゝりも山橋
 蘭哉
 山弓の尾の乃着や山さくく
 英保
 雲の幕幾重々までやうさく
 市柳
 沢島此を振出来あひつ初橋
 永我
 橋よ色世々んよ出て、舞の
 如雷
 交る所ハハ重よなりり山さくく
 南羅
 初橋よ之法かりて初さ久良
 如風
 漱とかなも岸の何〜や橋川
 湖風
 乃海ハさくくよ習人山婦く
 拾葉
 逢ひ子の一枚か川く橋、か
 嵐亭

雲よ飛て舞ち若中山さ久良
 若水
 白浪と園の價や山さ久良
 瑠璃
 橋戸ハ推てく入き宮の門
 蝙蝠子
 温泉の山や只もさくく川橋
 圻山
 深山本よ隠〜蔭あり初さく
 女言
 くも出てねもてふなり山さ久良
 沾慶
 下伏又園とつらく〜久良子
 竹都
 濛糸水てゆか香ある系橋
 調布
 雪くや風の下谷や夕を久良
 友鷗
 きせふより星の落さど初さく
 白翅

性
 三

樓ハあゝの足代や山を久良 曙山
 山の端や落る月を空を川橋 蟻洛
 道世よ追人のかゝるさくさく 花傘
 火どかりさる里ハ震て山さくさ 耳得
 波る時ハ橋やさくさぬ橋下南 盈行
 吹上て空ハ音あつたさくさく 馬老
 分入進ん水音細く山さくさ 百茂
 初音もたよりぬ橋へさくさく 鯉半
 波揺て水よさくさくさくさく 柑之
 咲まはたとたまへん進ん橋哉 一 頼柯

山を川家よのよして橋可南 六渡
 依城のさくさくして名もさくさく 人左
 草亦よ人やは足代の山を久良 泰谷
 咲ぬあゝの波やり海を山を久良 兼 求光
 毛纏もあゝの波やり海を山を久良 里遂
 近よれとさくさく枝あつたさくさく 素江
 何ち断つとも名も多世山を久良 車童
 さくさく波る山や音も種にろく 麻竹
 是のさくさくの妻又さくさく 千婦
 波もさくさくの妻の姿や山を久良 燕波

列卒ふとよき来り人や極特
 白鳳
 女吟系
 山さ久良人たふて菟より
 鬼守
 咲揃ふ日ハたききふ揃下南
 沾我
 都の散よ来りて川さ久良
 自来
 菟交り人の往來や山さ久良
 太賀
 流れてハ田毎の花や菟さ久良
 湖青
 坂さ久良根よか一里より菟さ久良
 大耳
 日も爰よとまり定てさ久良
 眠我

布川の谷も出来て山さ久良
 青布
 屋くさくの口お定てさ久良
 爲好
 庭さ久良へ戻して菟さ久良
 竹賀
 堀山かき音おきかてさ久良
 杜門
 や久良菟身や音間の苗代田
 竹門
 ほくさ久良啼きて鉢せちかさ久良
 杉亭
 揃さく日かきあさ久良
 東居
 菟やさ久良世とて曇海さ久良
 波光
 敬ありく機廻上戸や山さ久良
 紀禿
 揃戸や系かき海さ久良
 連者

里のけりて遠も散かり山と久良
 本くへゆき高ま佳時をく哉
 斧の音志くく経て橋可南
 市井市の百石分てさくうか
 産くく又古所所幾つ八重さく
 山下りてはきの定ねさく哉
 咄何の中へ杖束さくか
 之れ若き紙や又著りり山橋
 吹落て白ま硯や山さく
 来さ道と又奥よせん橋将
 桂山
 吳橋
 風堂
 麥途
 信夫
 雷堂
 文素
 可風
 吐月
 蓼太

跋


日此のその美筆極ありとをささめんと呼てハ
 正花より一はく小変は此筆以て其妙なる
 傳へて深きなりとをささめんと呼てハ
 有る一此美筆なりと云ふをささめんと呼てハ
 山のさくをさくは此筆の目ものさくは此筆の
 之下くしてさくは武臣橋那大師の梅動筆の
 四州花をさくは此筆の目ものさくは此筆の



飛白之類

晉秋二齊仙
并善尺族
都雁撰

古今三句乃乃乃乃

批鏡撰

水乃音

批雲撰

百五十番句合

吐藁太

更心生造符

芭蕉翁七部披藁太撰

集多入寸 正花編

白牛撰

去來湖東同卷批鏡

五器一具 因竹撰

百瓢

張陽
馬老撰

梅の渡

張陽
左更撰

月下錄

古考為梅動生生園云
法花考為選

附合百番句合

藁太評
社中

俳諧無門關

藁太選

後遍花三斛

如雷選

俳諧子内附

